

富田林市埋蔵文化財調査報告31

平成11年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2000・3

富田林市教育委員会

はじめに

本書は平成11年度に実施いたしました国庫補助事業の発掘調査報告書です。

今回報告しますのは寺内町遺跡と新堂廃寺です。

富田林寺内町遺跡は本市のほぼ中央に位置する遺跡で、室町時代に興正寺別院を中心とした自治都市的性格をもつ町として成立しました。その後も南河内の中心的役割のある商業都市として発展し続け、現在も江戸時代の町並みを残しながら、富田林市の官公庁所在地として、その中核的な役割は失われていません。今回の調査ではそんな寺内町の成立以前の遺構が発見されました。調査範囲の制限からその全体像をつかむことは困難ではありますが、寺内町成立前の様子をかいま見ることができる調査として、その成果を評価することができます。

新堂廃寺は南河内最古の寺として早くから学界に知られている遺跡です。この寺院の周辺には寺院の瓦を焼いていたオガソジ池瓦窯とこの寺を造った豪族の墓と考えられているお龜石古墳があり、寺と生産域、そして墓域の三者が近接して存在するというきわめて恵まれた歴史的環境の備わった遺跡として全国的に注目されています。これらのことから本市ではこの新堂廃寺が史蹟として国からの指定を受け、我々の先祖の歴史に思いをはせる場所として活用できることを目指して、平成9年度から5カ年計画で範囲確認調査を進めています。今回はその3年目の調査として寺域の東部を調査し、東方建物の検出に成功しました。このことで再建後の新堂廃寺が従来考えられていた伽藍配置ではなく、南北一直線上に主要伽藍が並ぶ四天王寺式伽藍配置の東西に建物が配置された新堂廃寺式とも呼ぶべき、我が国初の伽藍配置をもつ寺院として再建されたことが判明しました。

最後になりましたが発掘調査に際しまして、多大なるご協力を賜りました土地所有者であります大阪府をはじめ、地元関係各位ならびに有益なご指導をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。今後とも文化財保護行政に対しまして、一層のご理解とご協力を賜りますようにお願い申しあげます。

平成12年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水富夫

例　　言

1. 本書は富田林市教育委員会が1999年度に、国庫および府費の補助受けて実施した寺内町遺跡と新堂廃寺の範囲確認調査の調査概要である。
2. 富田林寺内町遺跡の調査は富田林市文化財保護課、田中正利が平成11年6月1日に着手し、平成12年3月31日に終了した。
3. 新堂廃寺の調査は富田林市文化財保護課、栗田薫が平成11年9月8日に着手し、平成12年3月31日に終了した。
4. 本書で使用した方位と標高はすべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。また、土色については小山・竹原編『新版標準土色帳』を使用した。
5. 本書の執筆は寺内町遺跡を田中が、新堂廃寺は栗田が、編集は栗田が行った。
6. 調査および本書の作成にあたっては楠木理恵、瀬戸直子、前野美智子、山本節子の協力を得た。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査の実施および本書の作成にあたっては下記の諸氏に有益なご助言を頂いた。記してここに感謝の意を表します。(敬称略)

上原真人　山中一郎（京都大学）

上田　睦　山田幸広（藤井寺市教育委員会）

【新堂廃寺等調査指導委員会】

北野耕平（神戸商船大学名誉教授）

森　郁夫（帝塚山大学教授）

猪熊兼勝（京都橘女子大学教授）

金田章裕（京都大学教授）

栄原永遠男（大阪市立大学教授）

廣瀬和雄（奈良女子大学教授）

菱田哲郎（京都府立大学助教授）

松村恵司（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原京発掘調査部考古第2調査室長）

玉井　功（大阪府教育委員会文化財保護課主幹）

本文目次

はじめに

例言

I 富田林寺内町遺跡 (G C99) (田中正利)

1. 歴史的環境と既往の調査	1
2. 調査に至る経過	2
3. 調査の方法	2
4. 調査地の立地と基本層序	2
5. 調査成果	2
(1) 遺構	2
(2) 出土遺物	6
6. まとめ	10

II 新堂廃寺 (S H99) (栗田 煉)

1. 既往の調査	11
2. 調査に至る経過	13
3. 調査の方法	13
4. 調査地の立地と基本層序	14
5. 調査成果	14
6. 第Ⅱ期の遺構について	23
7. まとめ	26

挿図目次

図 1 富田林寺内町遺跡調査地位置図	1
図 2 富田林寺内町遺跡調査区位置図	2
図 3 富田林寺内町遺跡遺構平面図・断面図	3
図 4 富田林寺内町遺跡掘立柱建物平面図・断面図	4
図 5 富田林寺内町遺跡土坑4平面図・断面図	5
図 6 富田林寺内町遺跡出土遺物	7
図 7 新堂廃寺調査地位置図	11
図 8 新堂廃寺調査区位置図	12
図 9 新堂廃寺調査区設定図	13
図10 新堂廃寺遺構平面図・断面図	15・16
図11 新堂廃寺出土埴仏	18
図12 新堂廃寺出土遺物	19
図13 新堂廃寺遺構変遷図 (I ~ III期)	20

図14 新堂廃寺遺構変遷図(IV・V期)	21
図15 新堂廃寺東方建物推定位置図	25
図16 新堂廃寺伽藍配置想定図	26

表 目 次

表1 富田林寺内町遺跡土坑一覧表	5
表2 富田林寺内町遺跡ピット一覧表	6

図 版 目 次

図版1 (上) G C99 調査区全景 北から	
(下) G C99 調査区全景 南から	
図版2 (上右) G C99 土坑4断面 北から	
(上左) G C99 土坑4検出状況 北から	
(下) G C99 土坑4・ピット17近景 北から	
図版3 (上) G C99 掘立柱建物近景 北から	
(下) G C99 出土遺物	
図版4 (上) S H99 G地区溝2・瓦溜2検出状況 北から	
(下) S H99 G地区瓦溜2 北から	
図版5 (上) S H99 H地区溝9・溝10検出状況 西から	
(下) S H99 I地区溝9・ピット19~21検出状況 西から	
図版6 (上) S H99 I地区溝9・ピット17~21検出状況西から	
(下) S H99 I地区溝9断面 東から	
図版7 (上) S H99 F地区全景 北から	
(下) S H99 D・G・H地区全景 北西から	
図版8 (上) S H99 D地区全景 西から	
(下) S H99 D・G・H地区全景 南から	
図版9 (上) S H99 H地区全景 西から	
(下) S H99 G地区溝8断面 北から	
図版10 (上) S H99 D地区全景 北西から	
(下) S H99 D地区ピット16 南から	

I 富田林寺内町 (G C 99) 遺跡

1. 歴史的環境と既往の調査

富田林市のはば中央に位置する富田林寺内町は永禄3（1560）年頃に証秀上人が当時の領主から荒芝地を銭百貫文で買い取り、周辺にある中野、新堂、毛人谷、山中田の四ヶ村から人を集め、興正寺別院とそれを囲む町割りを造ったのがその始まりとされ、江戸時代には南河内屈指の在郷町として発達する。現在も重要文化財旧杉山家住宅をはじめとして多くの江戸時代の建物が残り、その町並みは当時の面影を忍ばせる。平成7年には重要伝統的建造物群保存地区として指定され、これらの景観を保存、維持していくため建物の修理、修景が進められ現在に至っている。

富田林寺内町遺跡で調査が行われたのは1985年の旧杉山家住宅の解体工事に先立つ調査が最初である。その後は住宅の建て替えなどに伴う小規模調査がほとんどであるが、富田林保育園建設に伴う調査、現寺内町センター建設に伴う調査など比較的広範囲の調査も行われている。しかし、いずれの調査も18世紀を中心とする時期の遺構が検出されただけで、いわゆる寺内町成立に関わる遺構の調査は行われていない。なお、江戸時代以外の遺構が検出された調査としては1991年度（G C 91-4）に飛鳥時代の建物跡が確認されている。

富田林寺内町遺跡の南西に隣接する谷川遺跡では古墳時代後期の大型掘柱建物が見つかっていることから、寺内町遺跡で飛鳥時代に集落が生まれる地盤がすでに築かれていたことが示唆される。

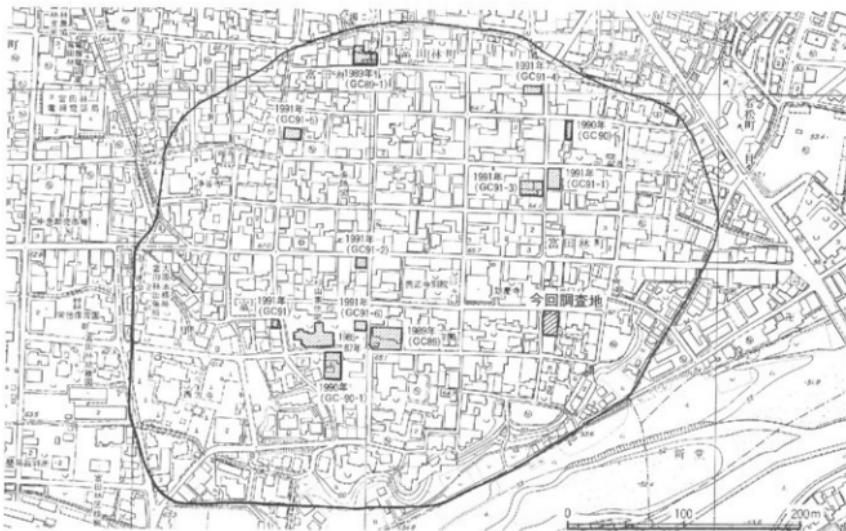


図1 富田林寺内町遺跡調査地位置図

2. 調査に至る経過

富田林市富田林町76番地において店舗付き住宅の建設が行われることになり、平成11年3月に発掘届出書が提出された。これに基づいて平成11年5月21日に遺構確認調査を行ったところ、現況から約0.8m下の地山面で柱穴が確認され、工事内容から事前に発掘調査が必要であると判断された。この結果を受けて協議を行い、建物部分約129m²について調査を行うこととなり、6月1日から6月18日まで現地調査を行った。

3. 調査の方法（図5）

調査地の南寄りに東西9.2m、南北14mの調査区を設定した。事前調査で地山より上層は現代の建物によって著しく破壊、搅乱されていることが確認されていたため、現況から約0.8m下にある地山直上まで機械で掘削を行い、その後慎重に入力で掘削し遺構検出を行った。

4. 調査地の立地と基本層序

G C 99

調査地：富田林市富田林町76番地

調査面積：129m²

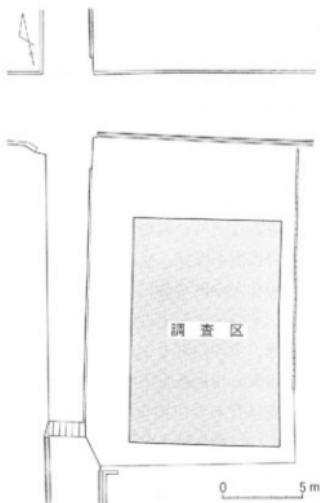


図2 富田林寺内町遺跡調査区位置図

今回の調査地は富田林寺内町遺跡が広がる河岸段丘の南東部に位置する。

各所で搅乱が著しいが、調査区北側で層序を確認することができた。層序は第1層目・表土、第2層目・オリーブ色土、第3層目・灰色土、第4層目・オリーブ褐色土、第5層目・褐色弱粘質土である。ただし、第2～3層が確認できるのは調査区北西部のみで、それ以外の部分では濁黄褐色土に置き換わる。また、第4層は西に行くに従って薄くなり、北西隅の部分ではこの層は認められない。第5層は調査区のほぼ全域で見られるが、現代の建物によって上面は搅乱されている。地山が西から東へ傾斜しており、第5層は寺内町成立後に行われた整地層と考えられる。

遺構はすべて地山面で検出しているが、一部の遺構は第5層上面から切り込んでいることが断面から確認でき、この面で別の時期の生活面が存在していたことが推測される。

5. 調査成果

(1) 遺構（図3）

今回の調査では溝2、掘立柱建物1、落ち込み状遺構2、土坑9、ピット26が検出された。以下、各遺構について記述する。

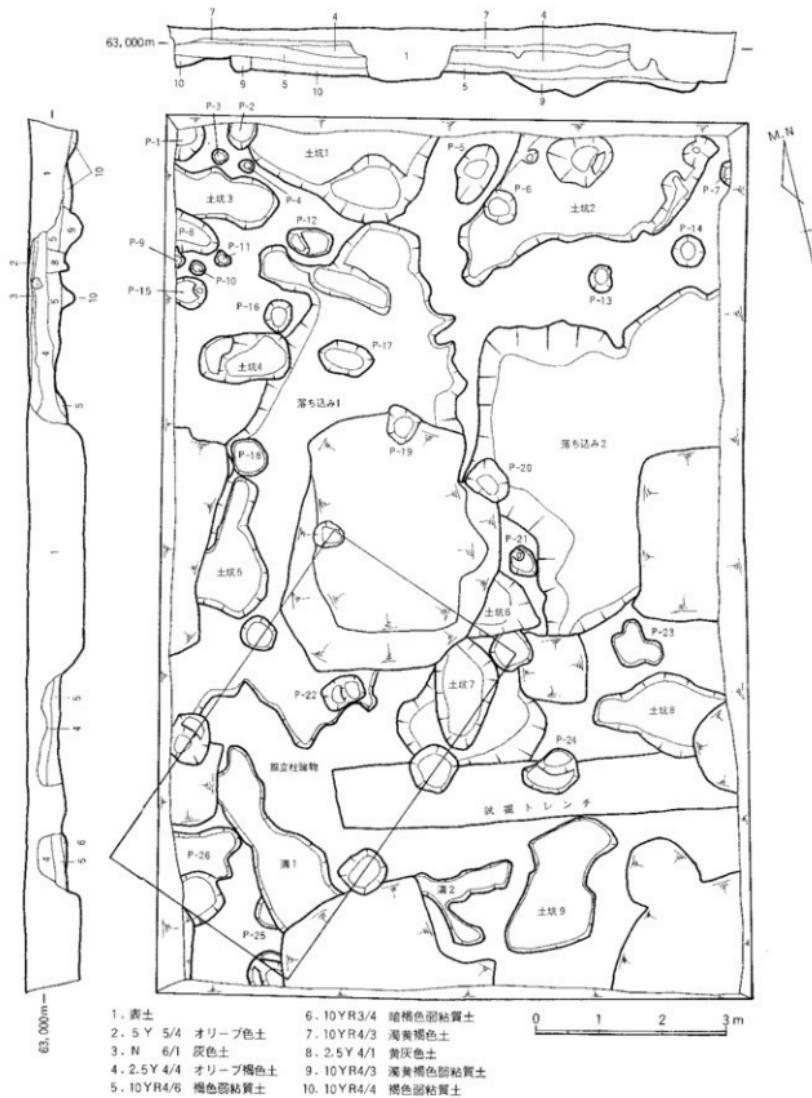


図3 富田林寺内町遺跡 遺構平面図・断面図

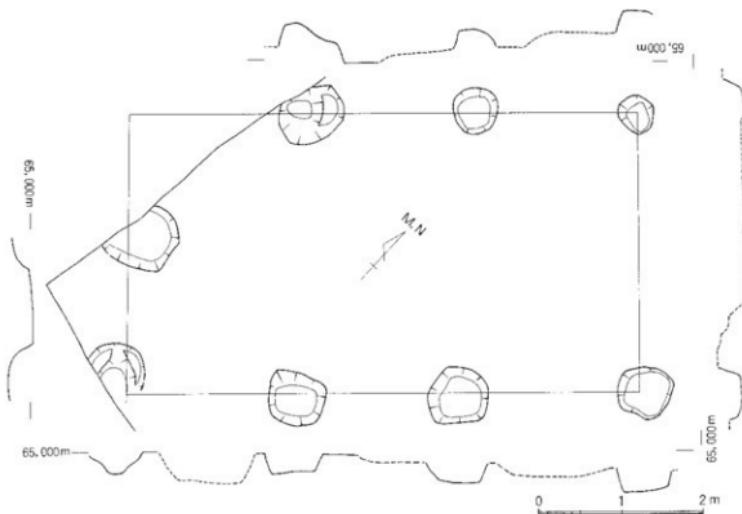


図4 富田林寺内町遺跡 挖立柱建物平面図・断面図

溝1

調査区南西部で検出した溝である。幅は0.6~1.2mで、深さは0.1mと浅い。約3m分検出しているが、底面は北西から南東に傾斜している。埋土は濁黄褐色弱粘質土である。

溝2

調査区南側で検出された東西方向の溝である。幅は0.4m、深さ0.1mで、1.5m分検出している。南側からもう1本細い溝が取り付く。埋土は褐色弱粘質土である。

掘立柱建物（図4）

調査区の南西部で検出された東西2間、南北3間の建物である。建物は磁北に対して約47度東に振っている。柱間は桁行で約1.9mであるのに対し、梁間では約2mと若干長くなっている。柱穴は直径約0.6mの不整形のもので、柱の痕跡を残すものはない。柱穴の多くが落ち込み1、落ち込み2の底面で検出されていることから、これらの遺構に先行する建物であることが推測できる。柱穴の埋土は褐色弱粘質土である。

落ち込み1

調査区中央よりやや西側にある南北に長い落ち込みで、東西幅が約3.3mある。深さは約0.3mで、東側の肩が緩やかに傾斜しているのに対し、西側の肩は傾斜が急になっている。埋土は濁黄褐色弱粘質土である。

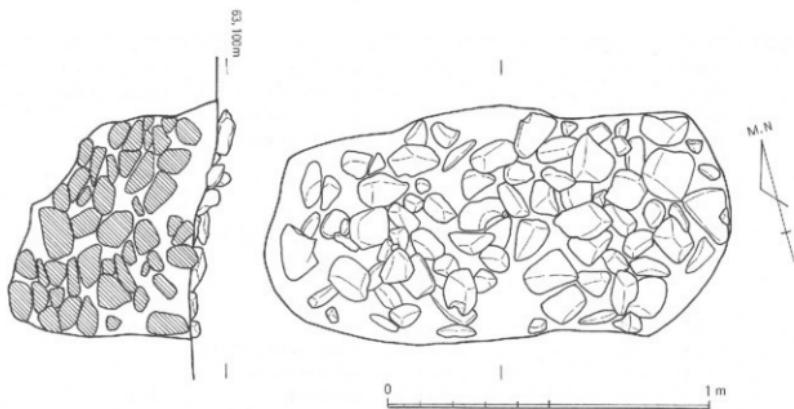


図5 富田林寺内町遺跡 土坑4平面図・断面図

落ち込み 2

調査区中央よりやや東側にある落ち込みで、落ち込み1に隣接している。南北に長く、東西幅は搅乱が著しく正確には不明であるが3m前後と考えられる。落ち込み1と同様、東側の肩は緩やかな傾斜であるが、西側の肩は傾斜が急になっている。埋土は上層・濁黄褐色弱粘質土、下層・暗褐色混砂疊弱粘質土の2層に分けることができるが、上層と下層の遺物に時期差はない。

土坑・ピット

土坑、ピットは調査区のほぼ全域で検出されているが、調査区の西側に多くみられる。埋土は大きく3種類に分けることができるが、褐色弱粘質土の遺構は掘立柱建物と、濁黄褐色弱粘質土の遺構は落ち込み1、2と同時期であると考えられる。

ここでは、特徴的な遺構である土坑4について取り上げることにし、これ以外の遺構については下の表1、2を参照されたい。

土坑4(図5)は、調査区の西側にある東西1.8m、南北0.9m、深さ0.7mの遺構である。土坑の中には多量の川原石が意図的に入れられており、土はあまり入っていない。埋土は黃灰色弱粘質土である。断面観察でこの埋土の遺構が第5層上面から切り込んでいることから、この遺構についても第5層から切り込んでいると考えられる。

遺構名	形 状	規 模(m)	深 さ(m)	埋 土	遺 物
土坑1(不整形)	(1.46) × (2.90)	0.26	10YR 4/4	褐色弱粘質土	
土坑2(不整形)	(2.44) × 3.16	0.37	10YR 4/3	濁黄褐色混砂疊弱粘質土	
土坑3(不整形)	0.84 × (1.64)	0.11	10YR 4/4	褐色弱粘質土	
土坑4(階円形)	1.44 × 0.77	0.75	2.5Y 4/1	黃灰色弱粘質土	土師質土器、瓦、磁器、礫石
土坑5(不整形)	2.26 × (1.10)	0.25	10YR 4/4	褐色弱粘質土	
土坑6(不整形)	1.16 × (0.93)	0.19	2.5Y 5/3	黃褐色弱粘質土	土師器
土坑7(不整形)	(1.85) × 0.98	0.13	10YR 4/4	褐色弱粘質土	
土坑8(不整形)	1.31 × (2.15)	0.05	10YR 4/3	濁黄褐色混砂疊弱粘質土	須恵器
土坑9	不整形	2.26 × 1.13	0.06	10YR 4/4	褐色弱粘質土

表1 富田林寺内町遺跡 土坑一覧表

遺構名	形 状	規 模 (m)	深 さ (m)	埋 土	遺 物
P-1	(不整形)	(0.47) × (0.43)	0.13	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	土師器、サヌカイト
P-2	(楕円形)	(0.41) × 0.45	0.18	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	土師器、須恵器
P-3	楕円形	0.21 × 0.25	0.04	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	
P-4	楕円形	0.21 × 0.24	0.06	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	
P-5	不整形	0.92 × 0.63	0.16	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-6	不整形	0.35 × 0.51	0.14	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-7	(楕円形)	0.40 × (0.18)	0.11	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-8	(不整形)	(0.74) × (0.67)	0.23	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	土師器、須恵器
P-9	(円 形)	0.31 × (0.15)	0.09	2.5Y 4/1 黄灰色弱粘質土	
P-10	不整形	0.22 × 0.26	0.10	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	土師器、須恵器
P-11	不整形	0.24 × 0.26	0.11	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	土師器
P-12	不整形	0.45 × 0.71	0.23	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	土師器、須恵器
P-13	不整形	0.44 × 0.37	0.12	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	
P-14	円 形	0.50 × 0.53	0.11	10YR 5/4 濁黄褐色弱粘質土	
P-15	(円 形)	0.54 × (0.50)	0.40	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	土師器
P-16	不整形	0.52 × 0.44	0.22	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	
P-17	楕円形	0.50 × 0.86	0.12	2.5Y 4/1 黄灰色弱粘質土	土師器、土師質土器
P-18	不整形	0.57 × 0.53	0.39	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-19	不整形	0.53 × 0.46	0.60	10YR 3/4 暗褐色混疊弱粘質土	土師器
P-20	不整形	0.55 × 0.71	0.31	10YR 3/4 黄褐色弱粘質土	
P-21	不整形	0.44 × 0.42	0.06	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-22	隅丸方形	0.45 × 0.66	0.25	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-23	不整形	0.72 × 0.77	0.10	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-24	不整形	0.70 × 0.91	0.26	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-25	隅丸方形	0.49 × 0.48	0.17	10YR 4/4 黄褐色弱粘質土	
P-26	(不整形)	1.47 × (1.02)	0.13	10YR 4/3 濁黄褐色混疊弱粘質土	

表2 富田林寺内町遺跡 ピット一覧表

(2) 出土遺物 (図6)

今回の調査では土師器、須恵器、甌の羽口、サヌカイト剝片、土師質土器、磁器が整理箱2箱分出土しており、その半分は落ち込み1と落ち込み2からの遺物である。ただし、ほとんどの土器が細片であり、全体の形が分かるものはあまりない。遺物の8割は土師器であり、江戸時代の遺物も出土しているが、その量はわずかである。

以下、各遺構ごとに遺物を見ていくこととする。

第4層出土遺物 (1, 2)

土師器、須恵器が出土している。

土師器

壺、甌、鍋、羽釜が出土している。

壺は2点が図化できた。口縁端部の内面をヨコナデすることで面取りを行っている。(1)は内面には放射状暗文、外面には横方向のミガキを施している。

甌は体部だけが出土しており、外面にハケ目調整を施している。鍋は把手の部分が出土している。外面は細かいハケ目、内面は粗いハケ目の調整を施している。羽釜は生駒西麓産胎土のもので、鍋のみ出土している。

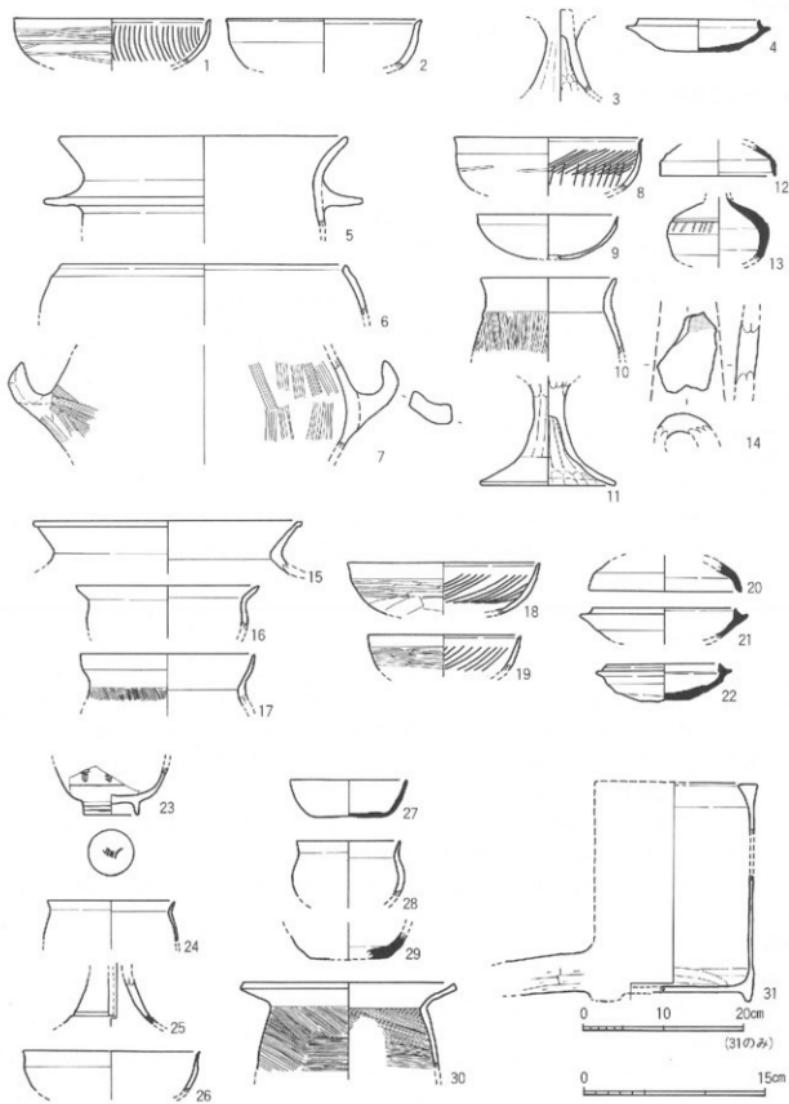


図6 富田林寺内町遺跡 出土遺物

須恵器

甕の体部片が数点出土しており、外面にカキ目調整を施すものとそうでないものがある。

第5層出土遺物（3, 4）

土師器、須恵器、サヌカイト、瓦が出土している。

土師器

高坏、坏、羽釜が出土している。

(3) の高坏の脚部は内面に指頭痕と絞り込みの痕跡が見られる。坏は体部のみが出土しており、内面には放射状暗文が施されている。羽釜は生駒西麓產胎土の鍔が出土している。

須恵器

(4) の坏身が出土している。底部はヘラ切り未調整で、受け部はほぼ水平に伸びる。

この他に、原面を残すサヌカイトの剥片が1点と、いぶし瓦の小片が1点出土している。

落ち込み1出土遺物（5～14）

土師器、須恵器、瓦、輪の羽口が出土している。

土師器

羽釜、鉢、甕、坏、高坏が出土している。

(5) の羽釜は口縁が大きく外反し、鍔がほぼ水平に延びる。生駒西麓產胎土で、調整は不明。

(6) の鉢は大型のもので、口縁が内反している。端部外面は強くヨコナデすることによって形を作っている。

(7) は鍔の体部片である。把手の先端は尖っており、内側が少し崖んでいる。内外面とも粗いハケ目調整が施されている。

坏は2点図化することができた。(8) は外面には横方向のミガキ、内面に2段の放射状暗文を施してあり、口縁端部は内面をなでることで面取りしている。(9) は表面が磨滅しており調整や口縁端部の面取りの有無は不明である。(9) は今回出土した土師器坏で唯一器高が推定できる資料であり、器高を直径で除した径高指数は32である。この他にも図化できなかったものが何点かあるが、螺旋状の暗文を施されたものはなかった。

(10) の小型甕は口縁の外反の度合いが緩やかで、体部は張りを持たずにはほまっすぐ延びている。体部外面には縦方向の細かいハケ目調整が施されている。

(11) の高坏脚部は、裾部と脚柱部の間の屈曲はあまり明瞭ではない。裾部内面には指頭痕が明瞭に残る。

須恵器

坏身、坏蓋、躰が出土している。

(12) の坏蓋は天井部が未調整で、口縁端部は丸く收めている。胎土には細かい砂粒が目立つ。

(13) の躰は体部のみが出土している。肩の部分には沈線が1条めぐらされている。その下の体部がもっとも張った部分には列点文が施されているが、一部は沈線部分にまで施文されており、間隔も一定ではなく、雑な印象を受ける。

坏身については小片のため図化していないが、立ち上がりが低く、受け部は水平よりやや上方に

延びている。

瓦

平瓦の破片が1点出土している。厚さは約1.5cmで、凸面はたたき具の痕跡が残らないように念入りなナデ消しを行い、凹面は布目が一部ナデ消されている。色調は灰色で、焼成は良好。胎土には細かい砂粒が多く含まれている。

罐の羽口

(14) は先端部の直径が5.0cm、後ろの部分が5.5cmで、先端部がややすぼまっている。色調は渴黃橙色であるが、先端部分が二次的な加熱によって灰色に変色しており、羽口の先端に近い部分と思われる。穴は中心からやや偏った位置にあり、直径は2.5cmである。

落ち込み2出土遺物（15～22）

土師器、須恵器が出土している。

土師器

壺、坏、高坏、羽釜が出土している。

壺は3点が図化できた。(15)は大型品の口縁で、口縁端部が外方に屈曲する。内外面とも丁寧なヨコナデで仕上げられている。

(16) (17) は小型品である。(16)は口縁が明瞭に屈曲しており、内外面ともナデによって調整されている。(17)は屈曲が緩やかで、体部外面には細かい縱方向のハケ目調整が施されている。

坏は2点が図化できた。口縁端部内面をヨコナデすることで面取りしており、体部内面には斜放射暗文を、口縁外面には横方向のミガキを施している。(18)の底部外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

高坏は脚部の裾部分が出土している。外面はヨコナデされており、内面には指頭痕が明瞭に残る。

羽釜は鍔が出土している。生駒西麓産胎土のもので、表面が磨滅しており調整は不明である。

須恵器

坏身、坏蓋が出土している。

(20)の坏蓋は口縁と体部の境が不明瞭で、扁平である。焼成はやや甘い。(21)の坏身も焼成がやや甘く、受け部は水平よりやや上方に伸びる。(22)は胎土に大粒の砂粒が混じり、底部外面はヘラ切り未調整である。受け部はほぼ水平に伸びる。

ピット・土坑出土遺物（23～31）

(23)は肥前系の染め付け椀である。高台に線が2条、外面には線1条と「寿」文と思われる文様が呉須で施されている。見込みは何も描かれていない。底部に銘が認められる。土坑4出土。

(24)は土師器の小型壺で、口縁は短くあまり外反せず、体部はあまり張りを持たない。くびれ部は不明瞭である。調整などは摩滅が著しく不明。土坑5出土。

(25)は須恵器の高坏の脚部である。長方形の透かしを持ち、その下端は沈線に一部かかるが、透かしの幅や長さは小片のため不明である。土坑5出土。

(26)は土師器の坏である。表面の磨滅や剥離が著しいため、調整や口縁端部の面取りの有無は不明である。土坑7出土。

(27) は須恵器壺である。底部外面は未調整、他はヨコナデで仕上げられている。ピット8出土。

(28) は土師器の小型壺である。膨らみの緩い球形の体部を持ち、くびれ部は不明瞭である。口縁はヨコナデで仕上げられている。ピット11出土。

(29) は須恵器壺の底部である。器壁が厚く、底部内面が謙むようになっている。内面には赤色顔料が付着している。ピット16出土。

(30) は土師器の甕である。口縁が大きく外反しており、体部には内外面ともにハケによる調整が施されているが、体部内面のハケ目は一部指ナデによって消されている。ピット17出土。

(31) は土師質土器の甕である。小片からの復元であり、正確な形状はよく分からない。底部は真円形ではなく、楕円形または小判形をしている。底部には低い脚がつく。口縁内面は大きく肥厚させており、煤が付着している。体部は底部や口縁部に比べて薄く、表面の剥離が著しく見られる。底部から体部へ立ち上がる部分の内面はヨコナデをした後に、斜め方向のナデを行っている。焚き口部は低く、外面はヘラケズリを行っている。ピット17出土。

6. まとめ

今回の調査では寺内町成立以前の遺構と、江戸時代の遺構が検出された。

寺内町成立以前の遺構としては掘立柱建物、落ち込み、溝、土坑、ピットが検出され、この辺りに集落が営まれていたことが推測される。今回検出された建物は1棟であるが、柱穴と同じ規模のピットが調査区北西部を中心に見られる。これらの遺構には切り合いが見られ、掘立柱建物が落ち込みより先行していることが分かる。落ち込みの時期については出土遺物から7世紀前葉に埋まつたと考えられる。掘立柱建物の時期については、同時期の遺構から長方形透かしを持つ須恵器高壺の脚部が出土しており、6世紀後半～末頃と考えられる。

今回調査した地点の北方で行われたG C91-4の調査でも飛鳥時代の建物が確認されており、寺内町の東側に寺内町成立以前の集落が広がっていることが分かってきた。東西の広がりに付いては寺内町中央から西側にかけての地域でこの時期の遺構面の調査例がないためよく分かっていない。

飛鳥時代の集落が廃棄されてから寺内町が造られるまでの間の時期については、調査地において生活が営まれた形跡はなく、遺物も出土していない。

江戸時代の遺構は土坑、ピットが検出された。今回検出された遺構は後世の擾乱後も残った比較的深い遺構だけであり、寺内町成立後のこの辺りの状況を知りうる資料は少ない。川原石が詰められていた土坑4の性格についてはその他の遺構の状態が分からぬいため不明である。

寺内町成立後の遺構面についてはこれまでの調査で2面確認されており、第1面が18世紀末～19世紀にかけて、第2面が18世紀後半の生活面と考えられている。今回の層序をこれまでの調査のものと比較すると第4層上面が第1面、第5層上面が第2面に相当すると見られ、今回検出された遺構は第5層から切り込んでいることから18世紀後半の遺構であると考えられる。

また、これまでの調査で包含層などから15～17世紀に遡る遺物が出土しているものの、遺構は確認されていない。今回の調査でもこれらの時期の遺構、遺物は検出されず、考古学的に寺内町成立当初の様子やこれに先行する集落の有無について知ることはできない。

以上のようにまだ不明な点が多いが、今後の調査で明らかにしていく必要があるだろう。

II 新堂廃寺

1. 既往の調査

富田林市緑ヶ丘町に広がる新堂廃寺は大正時代から古瓦が出土することで知られていたが、1936年、石田茂作氏によって『飛鳥時代寺院址の研究』で紹介され、南河内最古の古代寺院として広くその存在が認められるようになった。

1959年、府営住宅の建設計画がもちあがり、大阪大学によって試掘調査が行われた結果、瓦積基壇の一部が確認され（文献1）、翌1960年、大阪府教育委員会によって周辺約3500m²の全面発掘調査が行われた。その結果、南北一直線上に並ぶ白鳳時代の建物3棟とその西側に奈良時代の瓦積基壇建物が確認された（文献2）。そこでこれら伽藍の主要部分は広場として保存されることになったが、この保存区域には主要伽藍の東方部分が含まれず、その上、その東半部分にはすでに住宅が建設されていたことから未調査になっていた。

1992年、この地域の府営住宅の老朽化による建て替え計画がおこり、再度、住宅建設時に未調査



図7 新堂廃寺調査地位置図

であった部分について試掘調査を行うことで、寺域の確定と保存区域の見直しが計られることになった。1993年、大阪府教育委員会によってトレンチが31本入れられ保存区域の再検討が行われ、建て替え工事部分の調査が行われた。1995年の府営住宅第1期建て替え工事に伴う調査は推定寺域外の北東部にあたり、奈良時代から平安時代の建物群が検出された。その結果、これらは再建された寺院の維持・経営に関わった人々の集落として結論づけられた（文献4）。1997年、富田林市教育委員会では新堂廃寺の建立に関わった氏族の墓と考えられているお龜石古墳、この寺の瓦を焼いていたオガニジ池瓦窯を含めて新堂廃寺一帯を国の史蹟として指定を受けるため、5ヵ年計画で範囲確認調査を行うことになった。まず第1回目の1997年度は、今まで未調査であった寺域の東方部を（文献5）、翌

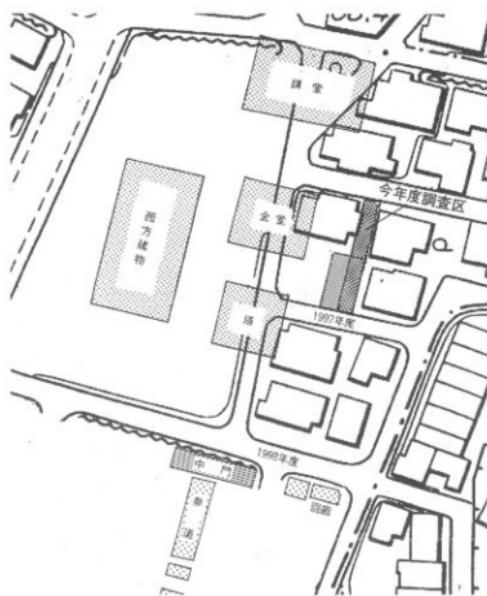


図8 新堂廃寺調査区位置図

1998年度には府営住宅第2期建て替え工事に伴う大阪府教育委員会の発掘調査と併行して、合同で寺域の南側を調査した。その結果、1997年度の東方部調査では建物の種類は確定できなかったものの基壇状の遺構らしきものを検出、1998年度の南側の調査では創建時の中門と東側に取り付く回廊、奈良時代の参道、南門と西側に取り付く築地塀跡、南門の前面に宝輦遺構、さらに南限区画溝などが確認された。これらのことから、新堂廃寺が飛鳥時代創建時には四天王寺式で建てられていたことが判明し、その後、白鳳時代に整地で寺域が広げられ、南北一直線に並ぶ3棟の建物が再建され、さらに西側に建物が追加されたと結論づけられた（文献5・6）。しかし、1997年度の東側で検出された基壇状遺構については、その建物を特定できるまでのデータを得ることができず、課題として残されたままになっていた。そしてこの基壇状遺構について3種類の建物が想定された。1つは中門完成時にすぐ南側が谷地形の湿地状態で、とても人が往来できるような状況でなかったことから、実用的な門が東側にあったと考え、その東門の基壇であった可能性を、2つ目は中門東側に取り付く回廊の東端が中世の遺構で潰されていて確認できなかったことから、潰されていたところで回廊が北へ折れ曲がるとすると回廊基壇の可能性もあり得るということを、3つ目は西方建物に対して東方にも建物があったのではないかという想定がなされた。

1999年、富田林市教育委員会では範囲確認調査の3年目として1997年に調査した東方部の基壇状遺構の性格を早急に確定することが必要であると判断し、1997年の調査区のすぐ北隣約40m²の調査と併せて、1997年度の調査区の内約20m²も再度、精査することにした。

2. 調査に至る経過

平成9年度（1997年）は、東方建物の存在の有無を確認することを目的に約50m²の調査区を設定し調査を行った。その結果、調査区の東側に南北方向の地山の高まりを検出した。その高まりが西高東低であるはずの自然地形と反して東高西低であること、さらに段差の方向が伽藍中軸線と一致することから何らかの建物基壇の西縁にあたる可能性が想定された。しかし、建物基壇と認定するには基壇化粧石の抜き取り痕や雨落ち溝、階段造構など基壇と判断するに足る施設を検出できないまま調査を終了した（文獻5）。

今年度は、その1997年度の調査を受けて北東側に新たに約40m²の調査区を設定し、地山の高まりの統計を検出することによって、その高まりを建物基壇として認定できるのかどうかを確定し、さらに1997年度調査で保留したままになっていた地山の高まりに付随する施設の有無を検討するため、1997年度の調査区の東半部約20m²をさらに掘り下げて調査を行った。

3. 調査の方法

今年度の調査区は約1m幅の畦を残して、推定伽藍中軸線を基軸に南北方向に3つに分割し、1997年度の調査区に近い南側から北に順にG地区、H地区、I地区と呼称し、1997年度の調査区はそのままD地区、F地区的名称を引き継いで行った。なお、遺構の名称と番付についてもまた1997年度の名称を引き継いだ(註1)。

1997年度で基本的な堆積状況を把握していたので、近世の遺構の検出面である第4層目上面までは機械で掘削を行っても調査に悪影響をおよぼさない下層は慎重に人力で発掘を行った。

水路

民家

I 地区

H 地区

G 地区

水路

(A)地区

D 地区

(B)地区

中輪線

(C)地区

F 地区

0 5 m

図9 新堂廃寺調査区設定図

(附 1)

1997年度の調査でF地区で検出したとしていたピット5・6については、今年度の再調査で遺構として認める必要がなく、第6層の中に含まれることが割明したので削除した。ただし遺構の番付はそのまま残し、欠番としておく。

4. 調査地の立地と基本層序

S H99

調査地：富田林市緑ヶ丘町1604-1

調査積：60m³

調査区全体の基本層序は大きく6層に分かれ、その下に地山がある。6層の堆積は上から順に第1層目（表土）府営住宅造成時の層を含む

第2層目（黄褐色粘質土〈10YR 5/6〉）

第3層目（灰黄褐色弱粘質土〈10YR 5/2〉に黄褐色粘質土〈2.5Y 5/3〉がブロック状に混入）

第4層目（にぶい黄褐色弱粘質土〈10YR 5/3〉）

第5層目（にぶい黄橙色弱粘質土〈10YR 6/4〉）

第6層目（橙色弱粘質土〈7.5YR 6/6〉に灰色弱粘質土〈N 6/〉が混じる）

調査区のうち、北端のI地区とH地区北半について、第3層目の下に中世の遺構が地山面まで存在するため、4層以下的基本堆積は存在しない。また、調査区の東約3分の1～4分の1は府営住宅の造成時の搅乱によって第1層目を取り除くと地山が現れる。

5. 調査成果

1997年度の調査時には各時期の遺構の存在状況が確認できていたので、今年度の調査区であるG～I地区については第3層目を取り除いてまず遺構検出を行い（第4層目上面）、さらに第4層目を取り除いたところと、部分的に存在する第5層目以下（第6層目上面）で上層遺構を検出した。1997年度の調査区は第5層目を取り除いたところで調査を保留していたため、今年度の調査区は1997年度の調査区と合わせて第6層目を掘り下げ、下層遺構を検出した。これらの各層ごとの遺構の検出状況と各層出土の遺構の切り合い関係から、大きく5期に分かれる遺構が検出できた。以下、時期毎に検出した遺構とおもな出土遺物を記述する。

第Ⅰ期（寺院造営前の遺構）

地山面で検出した遺構である。

D地区北端中央西寄りで検出したピット16とI地区中央西寄りで検出したピット21がある。

ピット16

半分だけ掘削した。規模約0.78×0.62m、深さ約0.36mを測る隅丸方形のピットである。埋土は明褐色粘質土（7.5YR 5/6）と灰色弱粘質土（5Y 6/1）が混ざったものをベースに褐色粘質土（7.5YR 4/3）と黒褐色粘質土（7.5YR 3/1）がブロック状に混じる。遺物は土器片が2点出土している。

なお、埋土は堅く締まり、瓦の出土がなかったことが寺院造営前の可能性を高めている。

ピット21

半分だけ掘削した。現存規模約0.73×0.44m、深さ約0.13mを測る隅丸方形のピットである。規模は近世の遺構で切られているため小さくなっている。もとはピット16と同程度の規模はあったと

上層遺構

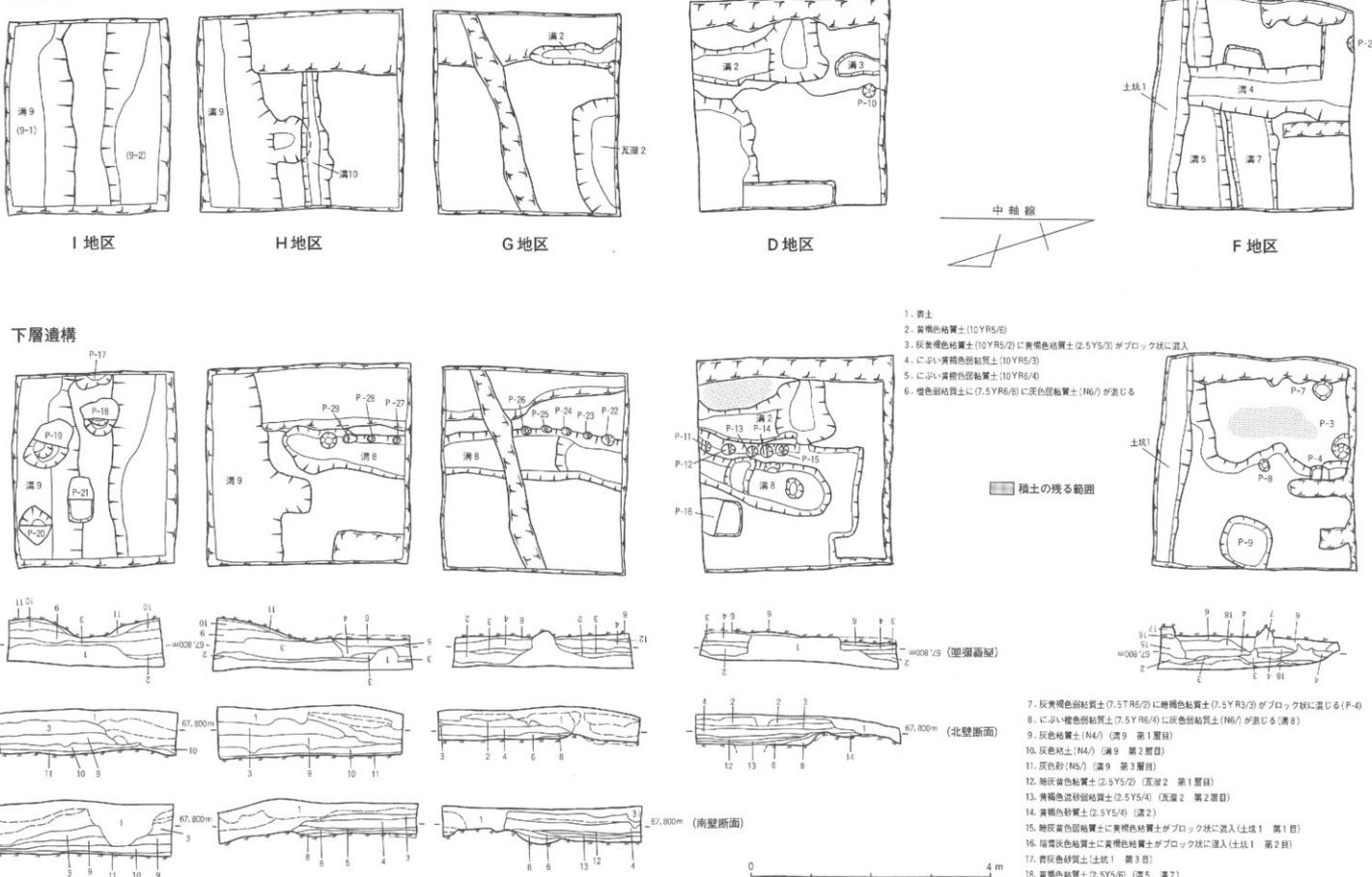


図10 新堂廃寺遺構平面図・断面図

推測できる。埋土は灰黄色土（2.5Y 6/2）に暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）が混じる。遺物はない。なお、ピット16と同じく埋土は堅く締まっていたが、ピット16との関係は不明である。

第Ⅱ期（寺院造営時の遺構）

地山面で検出した遺構である。

D地区、G地区、H地区にわたって、東部地山の高まりのすぐ西側で溝8を、また、D地区で地山の高まりと溝8の接した斜面でピット11～15を、G地区で同じくピット22～26を、H地区でも同じくピット27～29を、F地区で地山の高まりと西側の一段低い地山とが接する斜面でピット4（平成9年度検出）を検出した。

なお、南北方向に延びると確認されていた東部地山の高まりがD地区の南側で直交するように西側へ広がることが確認された。また、D・F地区の地山の高まりの一部にくすんだ範囲が広がることから、積土としてその範囲を示しておいた（図10）。

溝8

D地区、G地区、H地区にわたって検出した。南北方向の溝で、長さ約9.2m、最大幅約0.87mを測る。遺構の残りは全体に悪いが、南側へ行くほど残りがよく（D地区）、北に行くほど残りが悪く、浅くなっていく（H地区）。最も深いところで約0.12m、浅いところで約0.04mを測る。埋土はにぶい橙色弱粘質土（7.5YR6/4）に灰色弱粘質土（N 6/1）が混じる。なお、この埋土は直上の第6層、また直下の地山の色調と酷似する。

遺物は土師器の坏、蓋、高坏が各1点ずつ、土師器片2点、須恵器で半底の坏の底部2点、金属片1点のほか、平瓦が約30点、丸瓦が2点出土している。これらは細片が多い。

平瓦の凸面調整は平行叩きが1点、正格子叩き（4）3点が判別できるだけで、他は横方向のすり消しか、磨滅もしくは細片のため判別できない。丸瓦のうち1点（5）は行基式であることが分かる。なお、遺物はD地区の溝が最も深く残っていたところでまとまって出土しているが、全体にその量は少ない。図示した土師器の高坏（3）はH地区で、土師器の蓋（1）、須恵器の坏（2）はD地区で出土している（図12）。

ピット4・11～15・22～29

F地区で4を、D地区で11～15を、G地区で22～26を、H地区で27～29を検出した。すべて半分だけ掘削した。これらはすべて地山の高まりが西側傾斜して一段低くなしていく斜面で検出された。規模は直径0.19～0.21m程度、深さは0.02～0.06mの円形もしくは不整形なピットである。F、D地区は比較的の残りがいいが、G、H地区は残りが悪く、かろうじてそれとわかる程度である。埋土はすべて灰黄色弱粘質土（2.5Y 6/2）である。これらの内、ピット12からは凸面に正格子叩きの施された平瓦が、ピット14からは土器片が、ピット15からは平瓦片が出土している。なお、他のピットから遺物は出土していない。

第Ⅲ期（平安時代の遺構）

第6層上面で検出した遺構と地山面で検出した遺構がある。

G地区とD地区にかけて瓦溜2（D地区は1997年度に検出）、F地区で溝5・7（ともに1997年

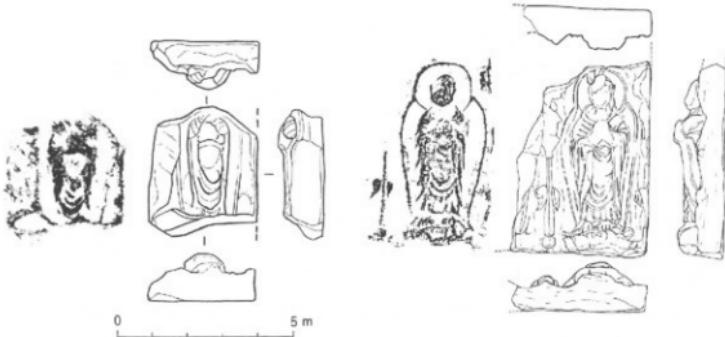


図11 新堂庵寺出土 塚仏（右側は大阪府教委調査時出土（文献3））

度検出)、D地区でピット10、F地区でピット2・3・7・8・9（9は1997年度に検出、今年度掘削)、I地区でピット17~20を検出した。

瓦溜2

G地区で1997年に検出した遺構の続きである。この結果、規模が南北幅約3.1m、東西幅約5.3m、深さ約0.1mを測ることが判明した。埋土は2層あり、上層は暗灰黄色粘質土(2.5Y 5/2)、下層は黄褐色混砂弱粘質土(2.5Y 5/4)である。遺物は上層の方が多い。上層からは瓦、須恵器、土師器、黒色土器、塚仏(図11)、砥石が、下層からは瓦の小片と土師器、黒色土器が出土している。図示したもの(図12)としては土師器の壺(7)と壺(9)、須恵器の蓋(6)、黒色土器の椀(8)、四重弧紋の軒平瓦(10・11)などがある。なお、塚仏は1997年の調査でも出土しているが、今回出土のものはそれらとはタイプが異なる。同じタイプのものは大阪府教育委員会が1993年に行った範囲確認調査のトレンチ16で出土している(文献3)。今回出土のものは上・下が欠失していて中央部分のみ残存している。

溝5. 7

1997年度にF地区で検出している。ともに東西方向の溝で、溝5は1997年度の調査区のC地区にも続き、最大幅約1.2m、検出長約7.5m(1997年度のC地区に続いている)、深さ約0.19mを、溝7は最大幅約0.7m、検出長2.7m、深さ約0.1mを測る。埋土はともに黄褐色粘質土(2.5Y 5/6)である。遺物は1997年度の調査時に取り上げられているため、今回は再度、存在を確認ただけである。なお、1997年度の遺物は溝5から瓦、土師器、螺髪、土製品が、溝7からは瓦と土師器が出土している。

ピット2・3・7~10

2・3・9については1997年度の調査で検出している。

ピット2は楕円形で、規模は約0.5×0.3m、深さ0.14mを測る。埋土は灰褐色弱粘質土である。遺物は出土していない。

ピット3は楕円形で、規模は約0.4×0.25m、深さ約0.02mを測る。埋土は黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

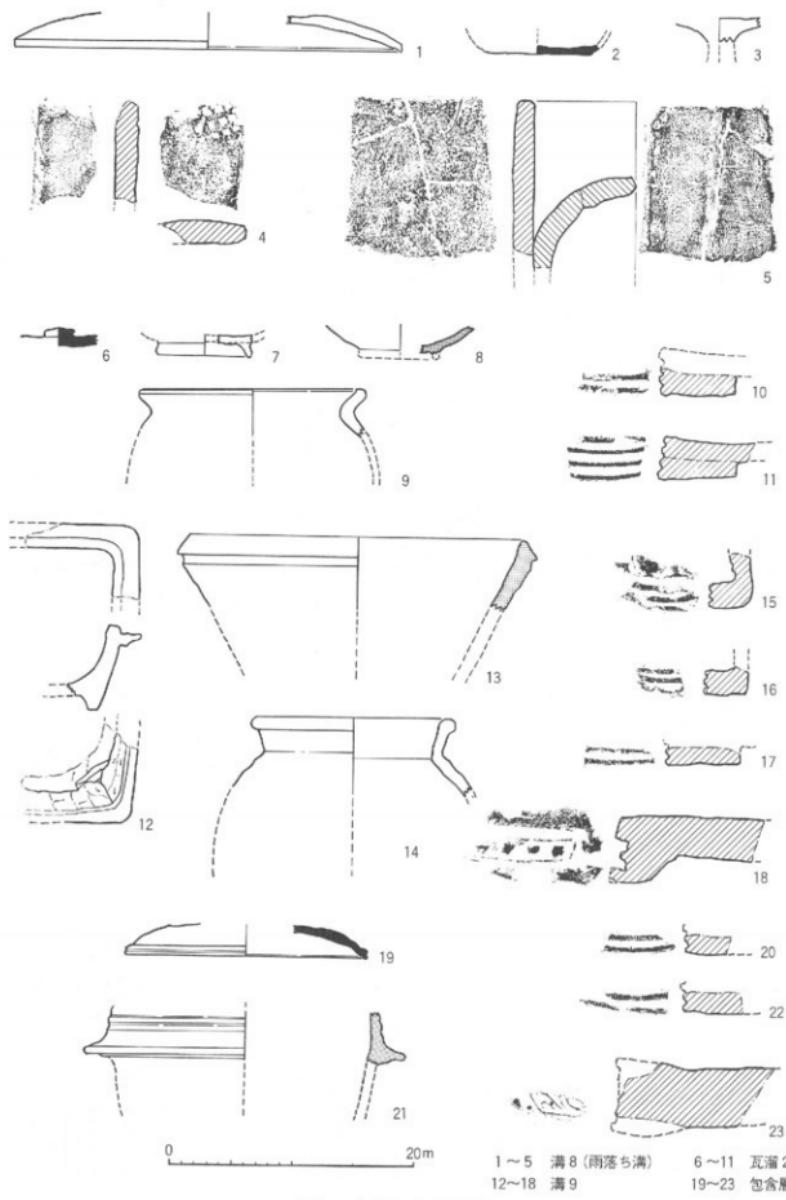
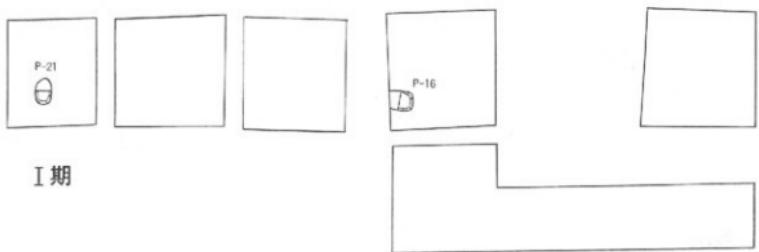
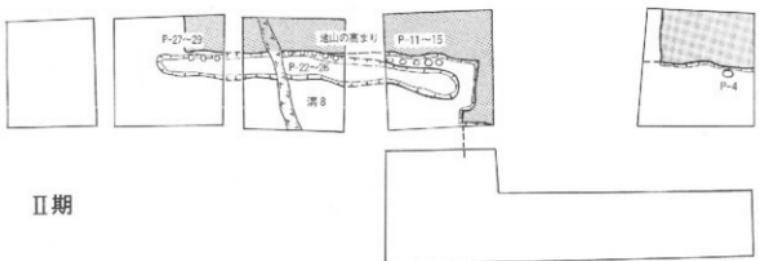


図12 新堂廃寺出土遺物



I期

中軸線
— X —



II期

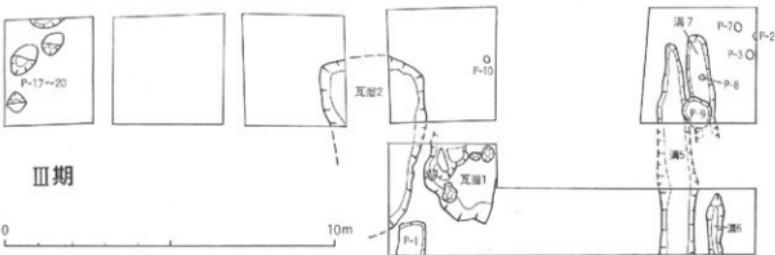


図13 新堂廃寺遺構変遷図 (I ~ III期)

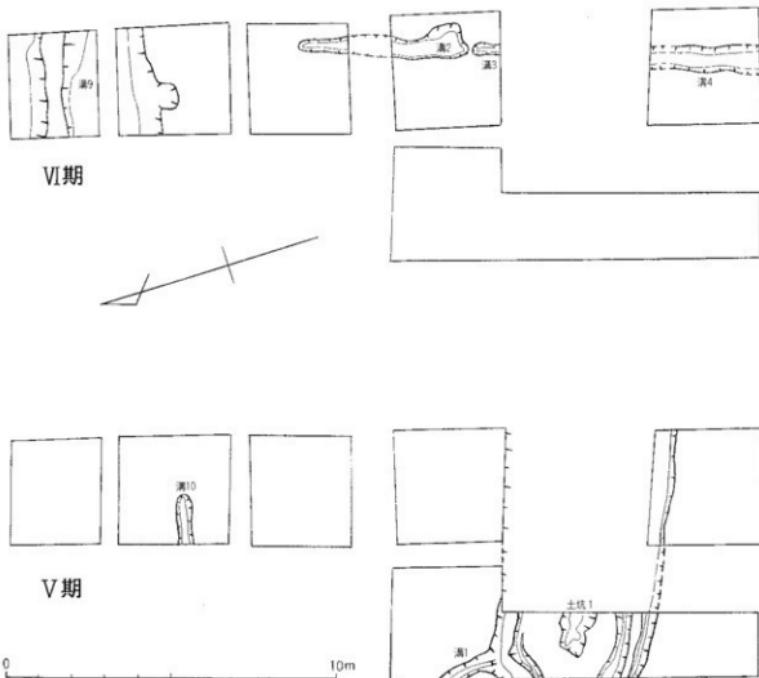


図14 新堂寺遺構変遷図（IV・V期）

ピット7は円形で、規模は直径約0.3m、深さ約0.09mを測る。埋土は灰黄褐色弱粘質（10YR 6/2）である。遺物は出土していない。

ピット8は円形で、規模は直径約0.17m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰黄褐色弱粘質土（10YR 6/2）である。遺物は出土していない。

ピット9は溝7に一部切られているが、第6層上面で検出した。隅丸方形の土壙で、規模は約0.83×0.83m、深さ約0.42mを測る。埋土は灰黄褐色弱粘質土（7.5YR6/2）に暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）がブロック状に混じる。遺物は平瓦が2点、土器片が1点出土している。

ピット10は椭円形で、規模は約0.22×1.8m、深さ約11.8mを測る。埋土は灰黄褐色弱粘質土（10YR 6/2）である。遺物は平瓦片が1点出土している。

ピット17～20

すべてI地区の溝9を掘削したあとの地山面で検出した。すべて半分だけ掘削した。

ピット17は東端中央で約半分程度検出した。不整形で規模は約0.6×(0.26)m、深さ約0.40mを測る。

ピット18は17のすぐ西側で検出した。不整形で、二段に落ち込んでいる。規模は約 0.64×0.64 mで、深さは約0.31mでフラットな面をもち、最も深いところで約0.42m測る。

ピット19は溝9-1の底で検出した。不整形で二段に落ち込んでいる。規模は約 0.96×0.63 m、深さは約0.63mのところで一段目があり、最も深いところで約0.79mを測る。

ピット20も溝9-1の底で検出した。隅丸方形で、規模は約 0.49×0.5 m、深さは約0.27mを測る。埋土はすべて橙色混砂弱粘質土（7.5YR 6/8）に灰色砂質土（7.5Y 6/1）が混じる。なお、19は下層にいくに従って灰色砂質土（7.5Y 6/1）の混入量が増える。

遺物はすべてのピットから量の多寡はあるものの、瓦片と土師器が出土している。それらは奈良時代後半までの新堂廃寺に関わる遺物であることから、寺院経営時の遺構である可能性も考えられるが、遺構の埋土が中世の遺構である溝9と類似すること、また、第Ⅱ期の遺構と埋土の状況が全く違うことから、この期に含めておいた。

第IV期（中世の遺構）

第4層下の地山上で検出したものと、第4層上面で検出したものがある。前者は第Ⅲ期の遺構を切っていることからこの期に含めた。後者からは中世の遺物が出土している。

D地区とG地区で溝2（D地区は平成9年度に検出）、D地区で溝3（平成9年度検出）、F地区で溝4（平成9年度検出）、I地区とH地区北半で溝9（9-1・9-2）を検出した。

溝2

南北方向の溝である。D地区で1997年度に検出した続きをG地区で検出した。これにより規模が長さ約5.3m、最大幅約1.04m、平均幅約0.61m、深さ約0.02mを測る。埋土は黄褐色砂質土（2.5Y 5/4）である。遺物はG地区では出土しなかったが、D地区で土師器と瓦が出土している。

溝3

1997年度に検出した南北方向の溝である。規模は検出長約0.8m、最大幅約0.4m、深さ0.02mを測る。埋土は3が灰オリーブ色砂質土である。遺物は土師器と瓦が出土している。

溝4

1997年度に検出した南北方向の溝である。規模は検出長約2.7m、幅約0.8m、深さ0.06mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は瓦が出土している。

溝9

東西方向の溝でI地区とH地区で検出した。埋土は3層あり、下の2層の堆積時では2本の溝であるが（I地区9-1、I・H地区9-2）、最上層の堆積はその2本の溝の全体に認められる。9-1は北端で検出したが、溝の北肩は調査区の北側にある。また、溝の西端、東端は調査区の外である。9-1の規模は検出幅約1.14m、検出長約3.21m、深さ約0.30mを測る。9-2の規模は最大幅約3.49m、平均幅約2.85m、深さ0.42mを測る。溝9として1本の溝になったときの規模は検出最大幅5.08m、検出平均幅約4.53mを測る。長さと幅は2本の時と同じである。埋土は最上層が灰色粘質土（N 4/）、中層が灰色粘土（N 4/）、下層が灰色砂（N 5/）である。遺物は9-1の最下層から土師器、瓦器、陶器、瓦が、9-2の最下層から土師器、須恵器、瓦質土器（13）、陶器が、9-1の中層から土師器、陶器（14）、サヌカイト剥片、焼土塊が、9-2の中層から土師器、

須恵器、瓦質土器（12）、瓦が、最上層から土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瓦が出土している。これらの遺物の中では瓦の出土量が圧倒的に多く、また、9-2から最も多く出土している。瓦の中には山田寺式の軒丸瓦（15・16）、四重弧紋の軒平瓦（17）、鎌倉時代の連珠文の軒平瓦（18）が認められる。また、平瓦には凸面に正格子目叩き、縄目叩き、横方向にすり消されたものが多く認められるが、平行叩きの施されたものはほとんどなかった。丸瓦も横方向にすり消したものが多いが、縄目叩きをすり消した玉縁のつくものも認められる（図12）。

第V期（近世の遺構）

第4層上面で検出した遺構である。

H地区で溝10、F地区で土坑1（1997年度検出、B・C地区にも続く）を検出している。

溝10

H地区で検出した東西溝である。西側は調査区の外に、東側は府営住宅造営時の搅乱で潰されている。規模は最大幅約0.52m、検出長約2.29m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰色土（N 5/）である。遺物の出土はなかった。

土坑1

1997年度の調査で検出している。今年度の調査ではF地区の北端で土坑の南端が幅約0.62mの範囲で検出されている。本来は南北4.7m、東西7.3m以上の規模をもつ方形の土坑で、最も深いところで0.6mを測る。埋土は3層に分層でき、上から暗灰黄色弱粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入する部分と灰オーリーブ色混砂粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入する部分が約0.3mの厚さで、次に暗青灰色粘質土に黄褐色粘質土が若干ブロック状に混入する層が約0.25mの厚さで、最下層は青灰色砂質土が0.05mの厚さで堆積する。遺物は磁器、陶器、瓦質土器、瓦器、黒色土器、土師器、須恵器、サヌカイト剥片、瓦が大量に出土したほか、埴仏も出土している。

5. II期の遺構について

前述したように遺構は大きく5時期に分かれることを確認したが、そのうち今回の調査で最も重要なのは第II期の新堂廃寺の建物造営時の遺構である。ここでは第II期の遺構について再度詳しく述べてみる。

1997年度の調査で人為的に削り残された地山の高まりを検出したことで、寺域東部に何らかの構築物があることが推測されたが、その性格を確定できないまま調査を終了した。今回はその成果を受けて、その地山の高まりが東方建物基壇として認定できるのか、もしくは回廊にあたるのか、東門の可能性があるのかという問題点を解決するために調査を行った。

第II期の遺構として最も関心をもっていた1997年度のD・F地区で検出した地山の高まりが、今年度の調査でもG地区、H地区で伽藍中軸線と平行しながらさらに北に延び、そしてそれがH地区中央北寄りで終わることが確認された。今回の調査で注目すべきことはこの地山の高まりがD地区南端部で伽藍中軸線に直交するように西側に向けて延び、突出部を形成していることが確認されたことである。突出部の現況は南北方向に延びる地山の高まりの北西角から約8.85mの位置で西へ屈折し、約1.47m延びたところで、再び北へ約0.32m屈折、さらに西に約0.32m屈折して全体に逆L

字状を呈している。この突出部はさらに西に延びると考えられるが、西側については1997年度のA地区にあたるが、そこでは平安時代の瓦罐1によって大きく掘削されていたことから確認できなかった。また、この突出部がどれだけの幅をもって存在するのか南辺も押さえなければいけないが、南辺についても近世の土坑1でF地区北端まで大きく掘削されていることから全体の規模を測ることはできなかった。しかし、F地区的状況からみて、南辺が近世の土坑1の範囲の中に収まりそうであることから、幅は最大に見積もって5.4m～5.7m程度であろうことは推測できる。

このほか、D・G・H地区では地山の高まりのすぐ西側に溝状造構が取り付き、やはり地山の高まりが終わるH地区の中央北寄りで溝も終わることが確認できている。この溝が北西端で東側に折れ曲がって、さらに東向きに延びるかどうかは府営住宅建築時の造成で東側が大きく掘削されて搅乱を受けているため確認できなかった。しかし、溝が地山の高まりよりさらに北に約1.4m延び、さらにその東端が10cm程度、高まり側に寄っていることを考えると、北東へ折れ曲がって延びていた可能性を考える必要があるかもしれない。

また、D・G・H地区では地山と溝の間にある段差部分で合計13個のピットを、F地区でも同じような位置にピットを1カ所確認している。

以上のような残存状況であるが、これらの造構を合わせ考えると伽藍中軸線の方向に沿う地山の高まりを廷物の基壇の西縁とし、その西に取り付く溝状造構（溝8）を雨落ち溝、突出部を階段跡、基壇と雨落ち溝の段差部分にあるピットについては、その検出位置から見て基壇化粧石列の抜き取り孔と想定できる。

次に上記の想定が認められるならば、今回の調査で検出された建物が新堂廃寺の全体の伽藍配置の中でどのような位置にあるのかをみてみたい。なお、それにあたっては昭和35年調査の報告書（文献2）の伽藍配置図と現在の住宅地図を合成して位置の復元を行った。縮小図からの復元であることから、若干のずれが生じていて正確とはいえないが、その中の復元であることを断つておく。

伽藍の中軸線は真北より17度20分東に偏し回調査の地山の高まりがその中軸線と一致することはすでに述べた。従って今回の造構は「東方建物」の西北部と考える。

昭和35年に検出された西方建物は瓦積基壇痕跡を発見した建物で規模は南北27.6m、東西16.42m、基壇東辺中央に間口5.6m、奥行3.2mの突出部がある構造で、基壇上面はほとんど削平され、わずかに土壇が高さ10cm程度残っているのみと記されている。また、突出部分は二つの部分からなり、南半は南側辺に凝灰岩据付痕跡があり、北半は一段低く、幅2.5mの範囲に瓦が敷き詰められ、その北縁に玉石が並べられてあったことから、最初南半部だけが作られ、凝灰岩でおおわれていて、後に北半が離ぎ足され、そのときに玉石で改装されたと考えられている。また、この瓦積み基壇をもつ建物以前に北辺で北に40cm、南辺で南に3.36m広く、東西は同じ幅の規模をもつ先行建物があったことも記している。これらのことから西方建物は奈良時代前期に南北31.36m、東西16.5mの基壇をもつ建物として成立したものが一度火災で消失し、その後、規模を縮小して奈良時代後期に再建していることが確認されている（文献2）。

次に、この東方建物が西方建物と伽藍中軸線で左右対称の建物であったとすると、西方建物の東辺と伽藍中軸線までの距離は約16mであることから、東方建物の西辺と同じく約16mあると考えなければならない。しかし、今回検出の東方建物の西辺とした部分は伽藍中軸線までの距離が約16.7mあり、約0.7m東へずれていることになる。また、今年度調査の階段と考えた突出部については、

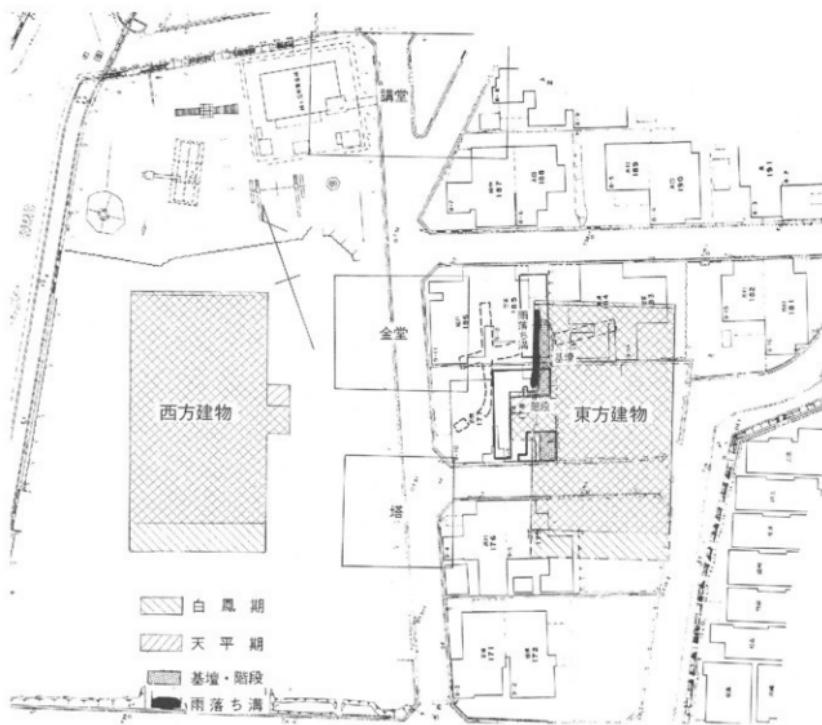


図15 新堂廃寺東方建物推定位置図

北西部の突起部分を除いた北辺が再建時の西方建物の階段の北辺とほぼ一致している。さらに規模については西方建物が階段北辺から長さが北へ約11.2mあるのに対して、今回の東方建物については階段北辺からの長さが約9mしかない。すなわち、再建前の西方建物より約2.2m、再建後のものより約1.66m短いことになる。

以上のことから、規模、位置などで西方建物と若干の差異があるものの、自然地形に反する地山の高まりが伽藍の中軸線に沿うように認められ、なおかつその高まりが一部階段部分のように突出し、さらにその西側に溝が取り付けられているという事実を合わせ考えると、西方建物とは対象位置にあるこれらの構築物を西方建物に対して東方建物と想定することがもっとも合理的であると考えられる。さらに、昭和34年の予備調査で今回の調査区のすぐ東側にトレンチが設定されているが（文献1）、そこで瓦の出土がほとんど見られなかったという所見は、今回の地山の高まりが東側にもさらに広がりをもつ建物基壇であったことと整合する。そしてそのトレンチ全体が基壇の範囲に取まるならば、その大きさは最低でも東西幅約9.3mとなり回廊と想定するには広くなりすぎる。

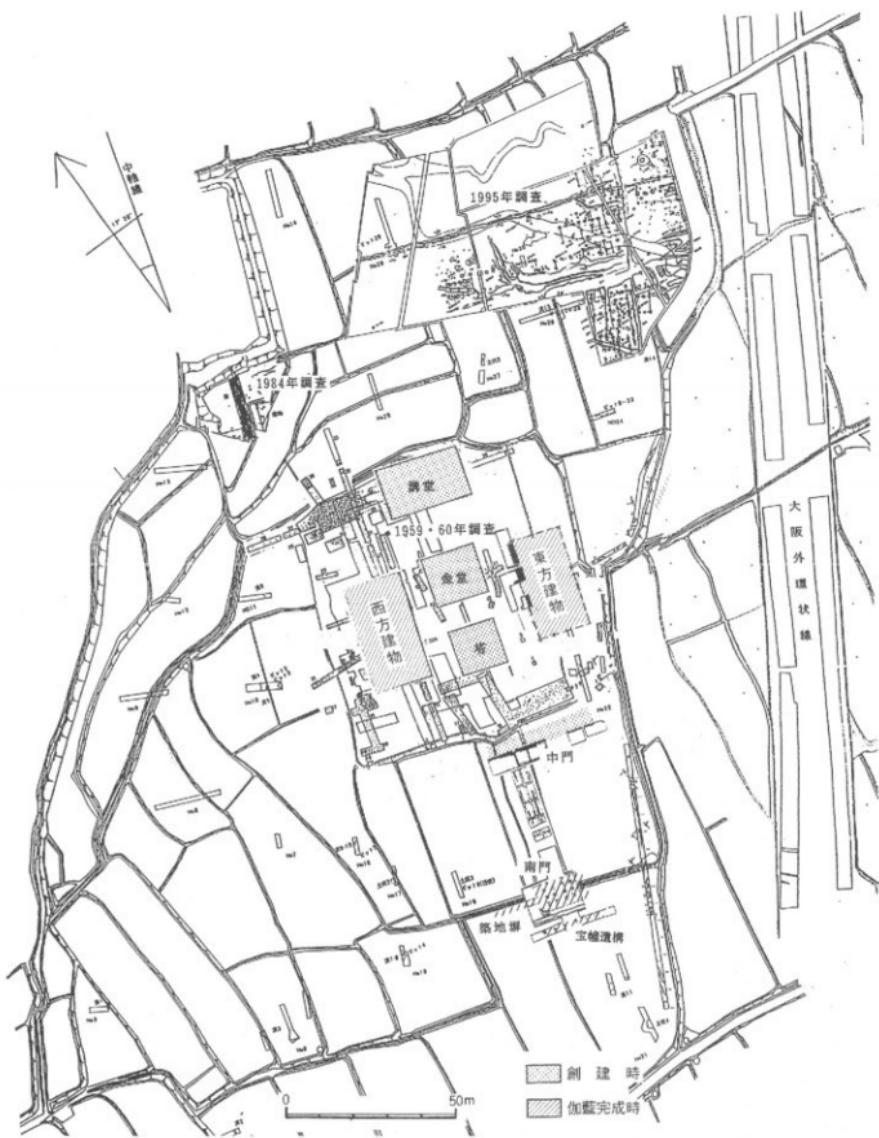


図16 新堂庵寺伽藍配置想定図

このことも今回の構築物が東方建物と認定するのに補強材料となるであろう。

次に東方建物の成立時期と廃絶時期について考えてみる。雨落ち溝から7世紀後半から8世紀初頭の土師器と須恵器が出土していること、瓦の出土量が少ないものの、それらの中に格子叩きものが認められるものの、縄目叩きの施されたものが認められないことから合わせ考えると白鳳時代に建てられたと推測できる。また、廃絶時期については雨落ち溝のすぐ上層である第6層を切り込む瓦溜が平安時代であることからそれまでに求めることができる。この瓦溜の中からは平安時代の黒色土器とともに縄目叩きの施された1枚作りの平瓦が多量に出土している。のことから天平時代にもここに建物が存続していたことは確実である。

今回の調査では西方建物のように立て替えの痕跡が検出できなかったものの、出土遺物からみて東方建物も西方建物と同じ時期に成立し、また、同じ時期に廃絶したと考えられるであろう。

6. まとめ

1960年の調査報告の中で建築的考察を行った浅野清氏は、新堂廃寺の伽藍配置について南向きと考へて四天王寺式とみるか、東向きとして川原寺式とみるかと仮定して考察している（文献2）。四天王寺式の場合、西方建物は特殊なものとしつつも、西方建物が東面していることから当麻寺にあるような曼荼羅堂前身建物のようなものとして理解している。現在、東方建物の存在が確実になったことから、川原寺式の伽藍配置を想定する必要はなくなったが、当時は新堂廃寺に講堂、金堂、塔、西方建物の存在しか知られていなかったので東向きの伽藍配置も想定され、その場合には川原寺式としつつも西方建物を正面中央の金堂とみると巨大になりすぎることと、その背後の伽藍の発展性が考えられないことから観世音寺のように講堂と考えれば無理がないと結論づけている。

昨年度の調査で新堂廃寺は飛鳥時代創建当初、北から南へ講堂、金堂、塔、中門と一直線上に並ぶ「四天王寺式」で建てられたことが、今年度の調査で白鳳時代になって創建当初の配列に東西に建物を追加配置して再建されたことが判明した。1960年にも西方建物の規模が大きすぎることが問題になり、その建物の性格づけに苦慮したように、今回検出された東方建物も西方建物と左右対称とするには位置、規模等に若干の問題を残すものの、ほぼ同規模のものと考えられることはすでに述べたとおりである。この再建後の新堂廃寺の伽藍配置は飛鳥寺の塔の周りに3つの金堂が配列されたものと似ている。しかし、飛鳥寺は塔の北、つまり正面に配置された中金堂の規模が、東西の金堂より大きいのに対して、新堂廃寺も「飛鳥寺式」の伽藍配置と見た場合、正面の金堂より東西の建物の方が二倍以上大きく建てられていることから、同じように金堂と考えには無理がありすぎる。すでに1960年に西方建物が金堂と考えるには巨大すぎると考えられてきたように、正面の金堂との大きさ違いを引き合いに出すまでもない。

これらのことから、再建後の新堂廃寺は我が国では他に例のない伽藍配置をもつ寺院であると評価すべきであると考える。それゆえ再建後の新堂廃寺の伽藍配置は『新堂廃寺式』と呼称しておく。そしてこれら東西の建物の性格については建物の間口が金堂・塔の方向を意識して配置されていること、また、上層出土ではあるが東方建物の周辺から螺髪、博仏など仏像関連遺物が出土していることから合わせ考えて僧坊などの施設と考えるより、礼堂的な性格をもつ施設として解釈しておきたい。

文 献

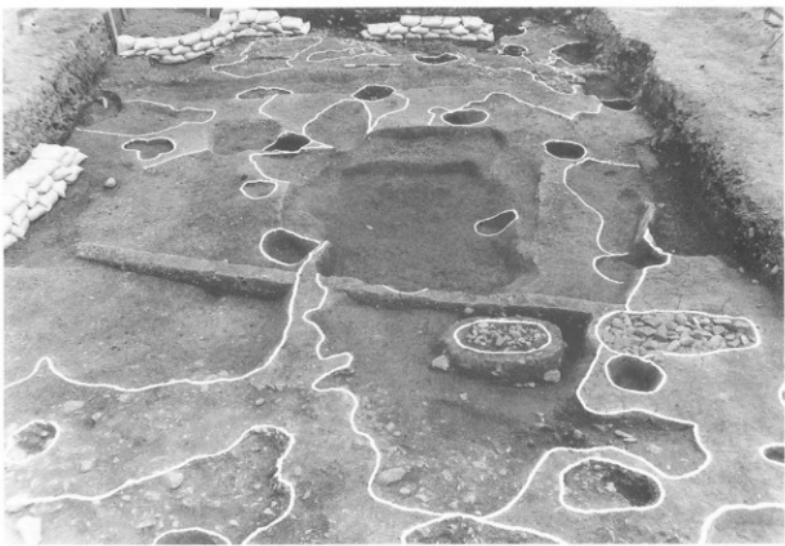
1. 北野耕平（1960年）『河内新堂廃寺』大阪大学
2. 浅野清、坪井清足、藤澤一夫（1961年）『河内新堂・烏含寺跡の調査』大阪府文化財調査報告第12輯 大阪府教育委員会
3. 井西貴子（1996年）『新堂廃寺調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会
4. 井西貴子（1997年）『新堂廃寺調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会
5. 中辻亘・栗田薰（1999年）『平成10年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市埋蔵文化財調査報告30 富田林市教育委員会
6. 小浜成（1999年）『新堂廃寺調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会

報告書抄録

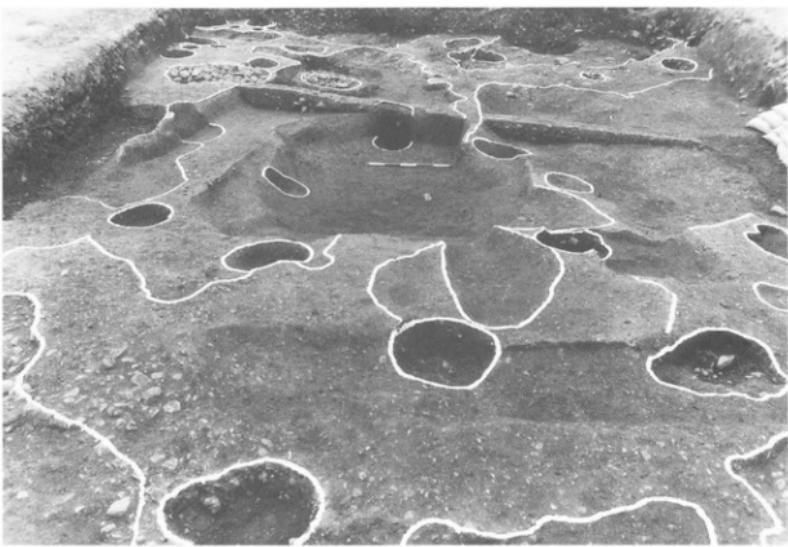
ふりがな	へいせい11ねんど とんだばやししないいせきぐんはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成11年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書						
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告						
卷次	31						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著書名	栗田 薫・田中正利						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所取遺跡名	所住地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		
とんだばやししないまち 富田林寺内町 いせき 遺跡	れおさかあととんだばやし 大阪府富田林市 とんだばやし 富田林町76	27214		34° 29' 47"	135° 36' 24"	1999.6.1 1999.6.18	129.0 店舗付き住宅 建設に伴う 緊急発掘調査
しんどうはいじ 新堂廃寺	れおさかあととんだばやし 大阪府富田林市 みどりがねのまとう 緑ヶ丘町1603-1	27214		34° 20' 24"	135° 36' 13"	1999.9.8 1999.9.30	60.0 寺域などの 範囲確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
富田林寺内町 遺跡	集落跡	飛鳥時代・近世	掘立柱建物 落ち込み、溝 上坑、ピット	土師器・須恵器・磁器 土師質土器・輪の羽口 サヌカイト			
新堂廃寺	寺院跡	弥生時代～近世	基壇状高まり 階段、雨落ち溝 化粧石抜取穴 溝、土坑 ピット	軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦・土師器 須恵器・黒色土器 瓦器・瓦質土器 陶磁器・輪の羽口 埴仏・サヌカイト	白鳳時代の東 方建物の基壇 を検出		

図 版

図版1 富田林寺内町遺跡



GC99 調査区全景（北から）



GC99 調査区全景（南から）



GC99 土坑4 検出状況 (北から)



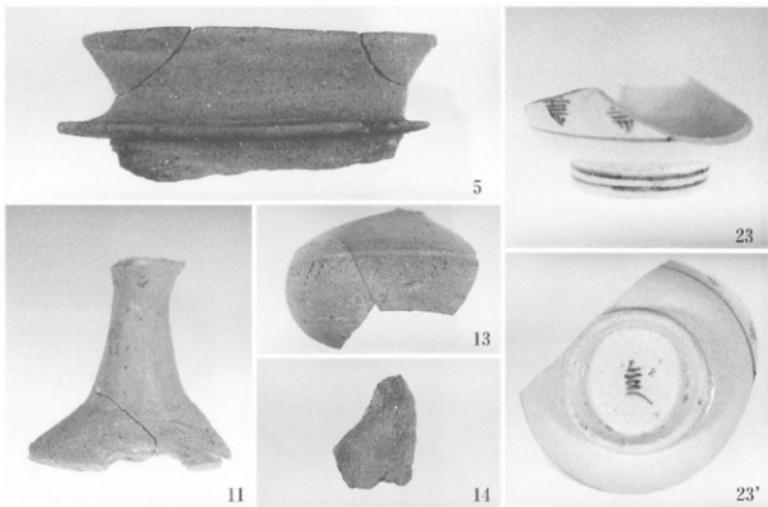
GC99 土坑4 断面 (北から)



GC99 土坑4・ピット17近景 (北から)



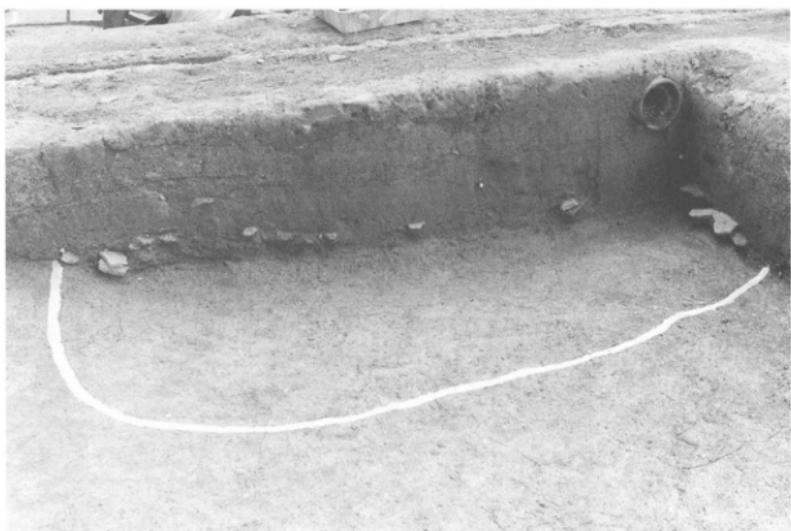
G C 99 掘立柱建物近景（北から）



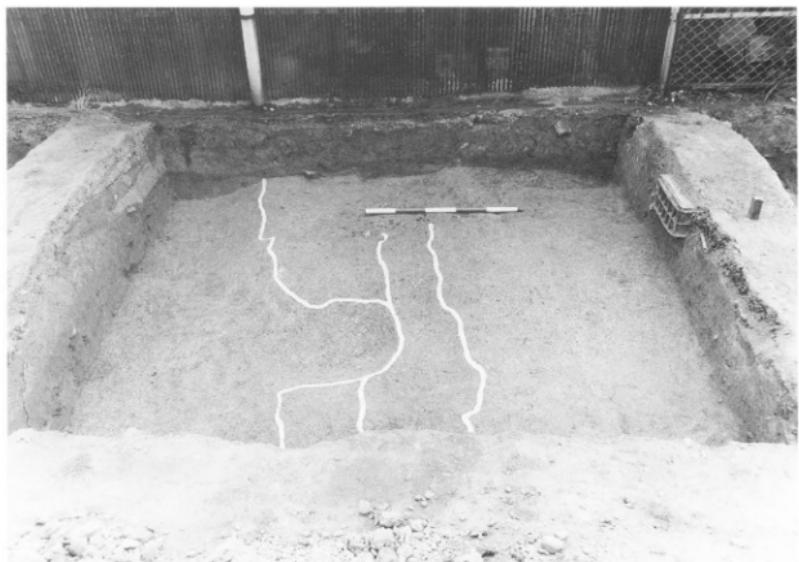
G C 99 出土遺物



SH99 G地区溝2・瓦溜2検出状況（北から）



SH99 G地区瓦溜2（北から）



SH99 H地区溝9・溝10検出状況（西から）



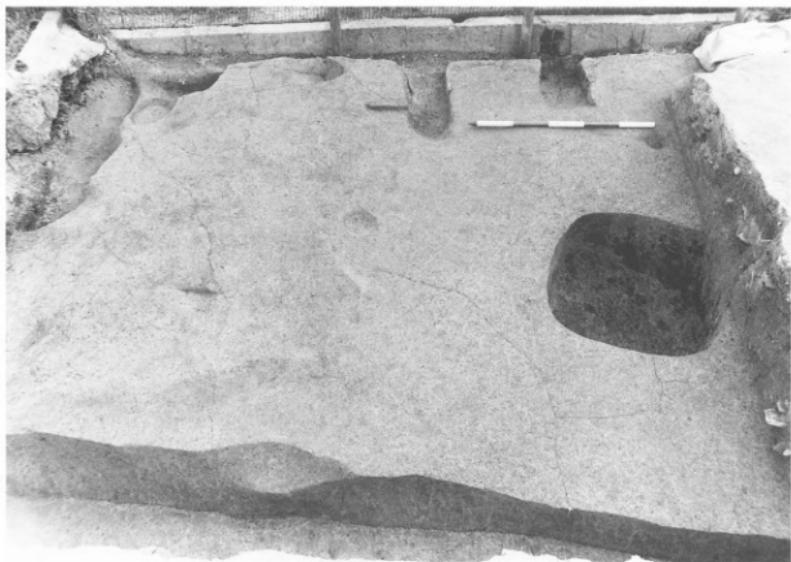
SH99 I地区溝9・ピット19~21検出状況（西から）



SH99 I地区溝9・ピット17~21検出状況（西から）



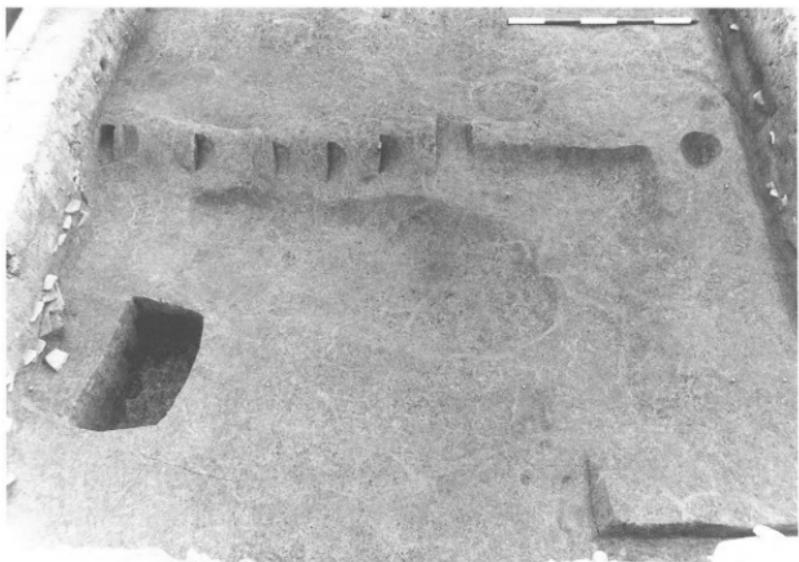
SH99 I地区溝9断面（東から）



SH99 F地区全景（北から）



SH99 D・G・H地区全景（北西から）



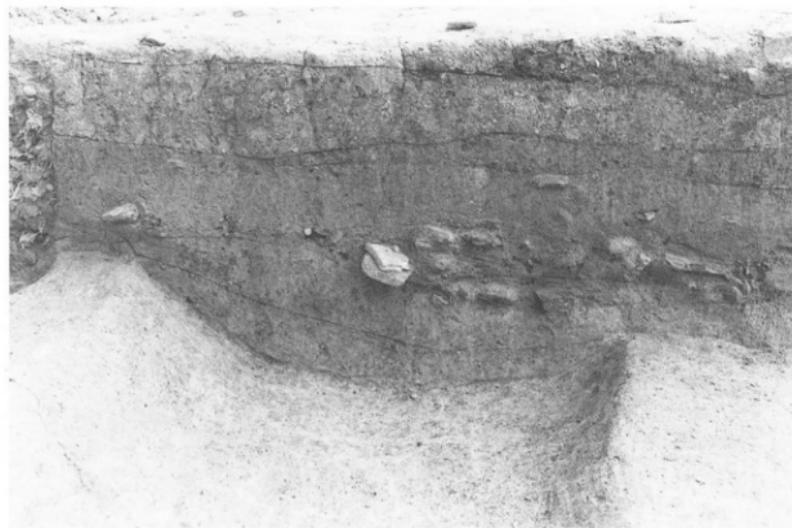
SH99 D地区全景（西から）



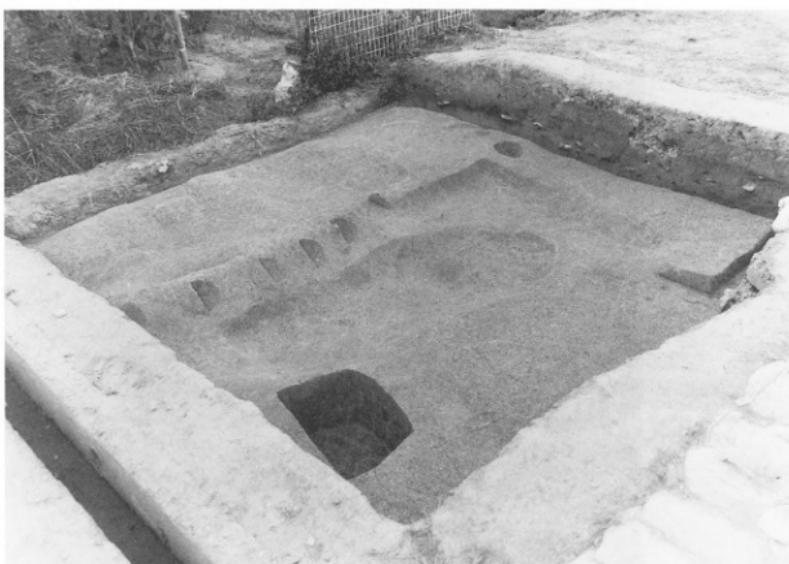
SH99 D・G・H地区全景
(南から)



S H99 H地区全景（西から）



S H99 G地区溝8断面（北から）



SH99 D地区全景（北西から）



SH99 D地区ピット16（南から）

富田林市埋蔵文化財調査報告31

発行年月日 2000年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

2000. 300

